



2026.3

53

はる号



【開催報告】

令和7年度丹後圏域地域リハビリテーション支援センター

・第3回事例検討会

「災害時における他職種から見たリハビリテーション専門職に求められる役割」

・第4回事例検討会

「子どものリハビリテーション支援へ一歩踏み出すために」

・丹後圏域地域リハビリテーション実践交流会 お気軽サミット

丹後圏域地域リハ支援センター 公式 LINE

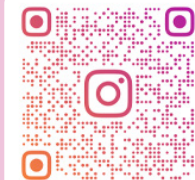
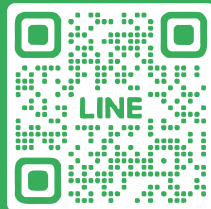
公式 Instagram

LINE 公式アカウント

友だち募集中

@513gckqy

研修会・事例検討会の最新情報は公式LINEでご案内しています
申込開始や締切前のリマインドも届くので、ぜひご登録ください。



TANGOREHA

令和7年度丹後圏域地域リハビリテーション支援センター第3回事例検討会

「災害時における他職種から見た リハビリテーション専門職に求められる役割」

日時: 令和8年1月9日(金) 17:30~19:30 場所: WEB開催 参加者: 20名

実践報告 「災害時における保健活動について—派遣支援の学びから—」

京都府丹後保健所 保健師 角正菜月氏
保健課 地域包括支援係



能登半島地震での派遣支援の経験をもとに、災害時の支援活動と平時からの備えについて実践報告をしていただきました。災害現場における保健師の活動や現場での気づきについてご紹介いただくとともに、事例検討会のテーマである「他職種から見たリハビリテーション専門職に求める役割」についてもご意見をいただくことができました。

主な内容

- 健康危機管理の基本(平常時の備え、有事対応、回復支援)
- 能登半島地震の特徴(高齢化、孤立集落、道路寸断)
- 派遣活動内容(避難所巡回、健康観察、感染対策、要配慮者支援)
- 多職種連携の重要性 ■ 丹後地域との共通点と今後の課題

主な気づき

- ・避難所環境が不十分
- ・ADL評価や環境調整の必要性
- ・リハ専門職の関与が重要

平時の取り組み

- ・京都府防災訓練の報告
- ・専門職連携訓練の実施

今後の方向性

- ・多職種連携の強化
- ・地域特性を踏まえた支援体制づくり

丹後地域との 共通点と今後の課題

高齢化率が高い
半島で主要道路が限られる
孤立しやすい地域特性

災害が起こってしまった場合
どのような対応が必要なのか
災害に備えて日頃からの備えが重要

リハビリテーション専門職への期待

- ・ADL評価や環境調整
- ・廃用症候群予防
- ・避難所全体の環境整備
- ・多職種連携によるQOL向上

平時からできること

- ・住民との顔の見える関係づくり
⇒有事の際、互いの安心感につながる
- ・患者の背景にある生活(地域の特徴、自宅等の環境)を常に意識してもらう
- ・地域の特徴を把握しておく。
(例) 地域に根付いている健康体操 等

- まとめ -

災害対応は行政だけでは限界があり、
多職種が連携した地域支援体制の構築が重要である。

実践報告

「DWATによる支援活動～西日本豪雨災害における活動の実際」

京都DWAT特別アドバイザー
華頂短期大学幼児教育学科 教授 武田康晴氏



災害派遣福祉チーム（DWAT）の活動について、特に2018年の西日本豪雨災害（岡山県倉敷市）での支援を中心に実践報告をしていただきました。災害支援の事例を通して、災害に備えた多職種連携の重要性や、リハビリテーション専門職に期待される役割についてお話いただきました。また、グループワークにも参加していただき、参加者の皆さんと意見交換を行う機会となりました。

DWAT（ディーワット）とは...

「Disaster Welfare Assistance Team（災害派遣福祉チーム）」の略。

大規模災害時に避難所で高齢者や障がい者、子どもなどの「要配慮者」を対象に、生活機能の低下防止や二次被害を防ぐための福祉的支援を行う専門職チーム



■ DWATの成り立ち

- 2011年 東日本大震災を契機に設立
- 医療・保険のみでは対応しきれない課題に対し、福祉職が主にチームを構成し、リハ職や管理栄養士など多職種と連携して災害支援に取り組んでいる。

■ DWATの活動目的

- 避難生活における二次被害防止
- 災害関連死の予防
- 要支援・要介護状態への移行防止

災害関連死とは、地震や津波などの直接的な被害ではなく、避難生活での心身の負担（疲労・ストレス、持病の悪化、エコノミークラス症候群など）や避難途中の身体的負担が原因で引き起こされる死亡のこと

高齢者や障害者、乳幼児など配慮を要する人だけでなく、もともと自立していた人が避難生活により身体機能や生活動作が悪化しないよう予防することを重視している。

■ 西日本豪雨での具体的支援

- 合同アセスメント実施
- 生活環境改善（椅子設置、段ボールベッド導入）
- 健康体操の実施
- 相談窓口の設置
- 多職種・多機関連携
- 仮設住宅移行後を見据えた支援引継ぎ

多職種連携

- 医療・保健・福祉が横並びで役割分担
- 各専門職が専門性を発揮することが重要

支援は「やってあげる」のではなく、地域住民が自立して復興できるよう側面支援する姿勢が大切である。

- まとめ
 - 支援は一時的であり、地域住民が自立して復興できるよう側面支援が必要
 - 福祉職として専門性を被災地に持ち込むことが重要

グループワーク

2グループに分かれて話し合い

テーマ:「災害時にリハビリテーション専門職に
求められる役割を学び、今後どうしていくか」

① リハビリテーション専門職に期待される役割

「できることはあるが、いきなりは難しい」
 平常の仕事の延長線ならイメージできる
 いきなり現場で判断・指導する自信はない

「専門職として役割の不明確さ」
 病院職員としてどう動くのか/誰がどこまで把握・調整するのか
 応援に来る側・受ける側の線引きはどこか

「リハの役割が伝わっていない」
 住民・行政のリハビリへの理解
 →「病院でのマッサージ・リハビリ訓練」止まり
 災害時に何をしてもらえるのか想像されていない

「専門性を持ち込む・つなぐ」
 OT・PT・ST・保健師・検査技師・事務職など
 それぞれの専門性が活きる
 保健師は情報集約・適切な専門職につなぐ役割

② 災害時に

「できそうなこと／難しそうなこと」

▶ できそうなこと

体操・活動(教室的な関わり)
 話を聞く、安心感をつくる関わり
 生活環境への助言(寝床・動線・姿勢など)
 安否確認、既存利用者への連絡
 何でも相談コーナー的な役割
 睡眠・寒さ対策など生活視点の助言

▶ 難しそうなこと

初動からの判断・即時介入
 現場全体を見渡した調整
 所属・立場が異なる中での情報共有
 災害直後の心理的動揺への対応
 病院業務と災害対応の両立

③ 平時からできる準備

/最低限やっておくべき準備

▶ 個人・職種レベル

「自分の専門性は災害時にどう活きるか」を言語化
 生活不活発病・避難所環境の基本知識を学ぶ
 住民・他職種へ普段の仕事を伝える機会づくり

▶ 施設・地域レベル

連絡体制・安否確認の整理
 応援が来た時に「何をどこまで共有するか」の整理
 個別避難計画へのリハ職の関与
 顔の見える関係づくり(研修・検討会)

▶ 行政・支援センターレベル

受援体制の整理
 情報発信(ニュース・HP・研修)
 多職種が関われる仕組みづくり

まとめ

- ・平時から「自分の専門性は災害時にどう活きるか」を言語化し、連絡体制や顔の見える関係づくりを進めること、そして多職種と連携しながら地域全体で備えていくことが重要。
- ・「何ができるかわからない」のではなく、「分からなくても関わっていいし、むしろ必要」。
- ・リハビリテーション専門職は平時だけでなく、災害時でも生活を見る専門職として活用できる。



参加者の感想

災害が多い中で、リハ職が地域の方々とどう関わっていけばよいか、災害が起きた後だけでなく、災害が起きる前にできることを検討していければ良いなと思いました。

知るだけでも次につながる種になる事を学びました。自分にはない視点が入る事で平常の取り組みや万一の災害支援につなげるネットワークや提案になるのかと考えが深まりました。貴重な機会でした。

リハビリテーション専門職として災害時に何が出来るのかを考える良いきっかけとなりました。また、平時からの連携の確立等が重要だと改めて感じました。

令和7年度丹後圏域地域リハビリテーション支援センター第4回事例検討会

「こどものリハビリテーション支援へ一歩踏み出すために」

日時: 令和8年1月21日(水) 18:00~19:30

場所: Web開催 参加者: 20名

実践報告

「発達期の作業療法について」

京都府立舞鶴子ども療育センター

作業療法士 金塚里奈 氏

作業療法士 小和田浩之 氏



発表では、京都府立舞鶴子ども療育センターにおける発達期の作業療法の実践について事例を通して紹介していただきました。発達期の作業療法は、遊びを中心とした作業活動を通して、運動機能やコミュニケーション機能の向上、日常生活動作の獲得を支援することを目的としており、あわせて保護者への関わり方の支援も重要な役割として位置づけられていることを学ばせていただきました。

「京都府立舞鶴子ども療育センター」の小児リハビリ

0歳から18歳までの幅広い年齢層の子どもの対象に、発達障害や脳性麻痺など多様な疾患に対応しており、現在は特に就学前児の利用が多い状況である。

作業療法の流れ

評価を行ったうえで
治療計画を立案・介入

保護者や関係者から
主訴や希望を丁寧に聴取

サイクルを繰り返す

その後の変化を
踏まえて計画を見直す

作業療法の評価

発達段階の確認に加え、運動機能、感覚特性、認知面、対人機能、コミュニケーション手段、遊びの段階、日常生活動作などを多角的に捉えている。

検査だけでなく、遊びや日常場面での様子観察や聞き取りを重視し、子ども一人ひとりの特性を総合的に理解することが大切にされている。

はしご昇降やジャンプ、
道具操作などの動作

姿勢調整、協調運動、視線の使い方、
両手動作の様子を評価

発語のない子どもに対して

身振りや模倣、指差しなどの
非言語的コミュニケーションを丁寧に評価

まとめ

本発表を通じて、発達期の作業療法は「できる・できない」を評価するものではなく、子どもの特性や環境との関係性を理解し、日常生活や遊びにつながる支援を積み重ねていく実践であることを教えていただきました。



情報交換

「参加者の各立場から子どもの
リハビリテーション支援を考える」



疑問・不安

「経験が浅く、何を基準に子どもを評価したらよいのか迷う」

「学校や関係機関との連携がうまく進まず悩んでいる」といった、

日々の実践の中で感じている率直な不安

「自宅という限られた環境の中で、子どもが楽しめる遊びを見つけることが難しい」

「大きな遊具がなくてもできる工夫を知りたい」



驚いた表情や、ふとした反応も、その子を理解する大切な手がかりになる

回答

「評価や訓練にとらわれすぎず、まずは子どもをよく知ることに」

「子どもがどんなことに興味を示すのか、

どんな感覚を心地よく感じているのかを一緒に探していくことが大切」

特別な道具がなくても、身近な素材や日用品を使って感覚を刺激したり、
子どもの反応を観察しながら関わることで自体が大切な支援になる。



令和6年度

「丹後圏域地域リハビリテーション実践交流会 お気軽サミット」

日時：令和8年2月6日（金）15:00～17:00

会場：丹後中央病院ふたばホール、WEB（ハイブリット開催）

参加者：41名（会場26名、WEB15名）

実践報告① 「生活期介護のその先へ」

life care かすみ 白間正樹 氏



白間さんより、**デイサービス楓**（伊根町・地域密着型通所介護）、
Life care かすみ（与謝野町・リハビリ特化型デイサービス）
について、それぞれの特徴と取り組みについて紹介されました。
「生活期介護のその先」を見据え、単なるサービス提供ではなく、楽しみながら継続できる
専門的リハビリの場づくりの重要性を示す内容でした。

デイサービス楓（地域密着型）

特徴 定員 16 名：要支援 1～要介護 4 まで対応
介護福祉士・看護師・PT・OT が在籍
生活全体を支える「安心できる通いの場」という位置づけ

取り組み 季節行事やレクリエーションを大切に、「楽しみながら通える場所」を目指す
集団体操や個別手技（約 15 分） / ADL 練習や歩行練習も実施
スタッフも利用者と一緒に活動を楽しむ姿勢を重視

Life care かすみ（リハビリ特化型）

特徴 定員 18 名：要支援 1～要介護 3 まで対応
理学療法士が常駐 / マシン運動や物理療法を導入
「専門性のある運動機会」を継続的に提供する

取り組み 全体体操、集団体操 / マシン運動、平行棒・階段昇降
エアロバイク、物理療法機器
PT による個別手技（約 10 分）



参加者の感想

デイサービスでお風呂に入るといふニーズは依然としてあるものの、リハビリニーズも高くデイサービスでリハビリをしたり体動かす事への意識付けができるのは素晴らしいと思う。

与謝野町にもリハビリできる事業所があること、かつ丁寧に関わっていただけ
ことを知り、安心につながりました。

実践報告②

「ひとりじゃない防災 ～避難訓練を通して見えた支え合いのかたち～」

障害者地域生活支援センターもみの木

渡邊 明子 氏



丹後圏域自立支援協議会医療的ケア部会
丹後保健所

行待 卓哉 氏



モデル児童を対象に、ご家族や関係スタッフとともに避難訓練を実施するまでの経過と、実際に行った訓練の内容について実践報告をしていただきました。
この取り組みからは、実際に動いて確かめることの重要性、家族の不安を丁寧に拾い上げる姿勢、そして地域と率直に協議することの大切さが示されました。テーマである「ひとりじゃない防災」は、制度や計画を整えるだけで実現するものではなく、地域でのつながりや相互理解があってこそ成り立つものであることを、あらためて学ぶ機会となりました。

医療的ケア部会とは・・・

丹後圏域障害者自立支援協議会の専門部会のひとつ。
医療的ケアが必要な障害児者の地域生活を支えるために、「課題の共有」、「関係機関の連携強化」、「解決策の具体的検討」を目的に活動している。

避難訓練までの経過

令和4～5年度：災害時対応の勉強会を実施
令和6年度：避難時の課題整理
令和7年度：モデル児童を対象に避難訓練を実施

段階的に検討を重ね、
実践につなげた取り組み

避難訓練に向けた検討内容

■ 想定の設定
「豪雨」よりも「地震」を想定
自宅に留まらず、公民館へ避難する設定

■ 家族の不安
荷物の重さ(おむつなど)
物資の事前備蓄の必要性
他にも支援が必要な高齢者世帯が多いこと

■ 地域との連携
当事者世帯のみで避難を実施
民生委員は見守り
有事の際に「存在に気づいてもらえる」仕組みづくり



避難訓練の実施と気づき

● 良かった点

- ・ 事前想定ができていたためスムーズに出発できた
- ・ 「避難するまで」ではなく、避難所で過ごすかどうかまでを見据えた訓練だった



● 課題

- ・ 荷物が重く、距離が遠く感じる
- ・ 路面の凹凸や積雪時の移動困難
- ・ 公民館近くのため池決壊リスク
- ・ 物資保管場所の不足

まとめ

自助だけでなく「共助の確認」が重要
地域との情報共有が命を守る

「日頃の人間関係づくり」が防災の基盤
医療的ケア児者の避難は「個別的、具体的」な検討が不可欠

参加者の感想

個別で避難計画があるのは、とてもいい取り組みだと感じました。有事の時どのような流れになるのかシミュレーションをしておくことは、本人、家族、支援者、そして地域住民にとってもいいことだと思います。共助の大切さも感じました。

災害時の避難についてはこれからも充実が必要かと思っておりますので、実践された内容を自立支援協議会の中の共有にとどめず、外への発信などをしていただいで、個々人が災害に備えられるといいなと感じました。

実践報告③

「地域課題を解決する？」 『しくみ』ではなく『とりくみ』

おむすびの会 世話係 いなおか じょうじ 氏



いなおか氏より、丹後地域の保健・医療・福祉の関係者がつながる場である「おむすびの会」の取り組みについてご紹介いただきました。活動の考え方として、「人と人とのつながりをつくること」、そして「小さな取り組みを積み重ねること」の大切さが示され、そうした積み重ねによって地域の連携を少しずつ良くしていくことができるという考えをお伝えいただきました。

発表の背景

- 地域では現在・・・
- ・ 支援が必要な人は増加
 - ・ 支援する人(専門職・関係者)は減少



- より一層の連携が求められているが・・・
- ・ 会議や制度など「仕組み」は増加
 - ・ 連携がしやすくなったとは感じにくい

連携がしづらい理由

専門職同士は、「所属」、「職種」、「役職」などは知っている



どんな人かまでは知らないことが多い

おむすびの会の目的

職種や役割を離れて交流する
仕事の前に「人としてのつながり」をつくる
気軽に話せる関係をつくる

期待

仕事での連携や協働がスムーズになること

おむすびの会の活動の考え方

厳しく義務的に行うものではなく、
ゆるく・楽しく・ワクワクする形で、
人と人を結ぶ活動として行われている。



「学習会」「イベント」「交流」など、
形を変えながら活動「しくみ」と「とりくみ」



しくみ(制度・組織)＝骨、とりくみ(活動・行動)＝筋肉、という例えが紹介されました。
仕組みだけでは動けない、取り組みだけでは疲弊してしまう。
そのため、「両者のバランスが大切」と述べられました。

「人と人とのつながりをつくること」
「小さな取り組みを積み重ねること」



地域の連携を少しずつ
良くしていくことができる



参加者の感想



多職種連携と言うものの、つながる人は自分からつながるけれど、そうでない人は「機会がない」となってしまうので、こうしたインフォーマルの機会はいくつあってもいいと思う。

仕事、行政にとらわれず交流することでいろんな支援につながり顔や人柄を知る事でいろんな場面で連携がスムーズに行えますね。介護サービス、行政の支援のすき間を少しでも埋める事が出来たらと私も常に思っています。



おむすびの会、このような取り組みがあることで、自然な連携が図れ、職種や領域を超えた地域住民としても繋がることのできるのには良いと感じます。

編集後記

今年度も、ステップアップ研修や事例検討会、リハビリテーション実践交流会を無事に開催することができました。ご参加・ご協力いただいた皆さまに心より感謝申し上げます。令和7年度は、「小児を含めた障害福祉」「介護予防事業」「災害リハビリ」「小児リハビリ」を丹後圏域の重点課題として取り上げ、皆さまと共に学び、考える機会を重ねてまいりました。それぞれの現場での実践につながる時間となっていれば幸いです。令和8年度も引き続き、丹後圏域の医療・福祉に携わる皆さまとともに、より良いサービスの提供を目指していきたいと考えております。今後ともご理解とご協力、そして積極的なご参加をどうぞよろしくお願いいたします。(H.S)

「丹後地域リハ」で検索！



編集/発行：丹後圏域地域リハビリテーション支援センター(公益財団法人丹後中央病院)
連絡先：Tel0772-62-8301FAX0772-62-8302 / e-mail tango-rehabili-shien@tangohp.com